

## 色弱のイメージを覆すための研究

Research to Combat Misconceptions About Partial Color-Blindness

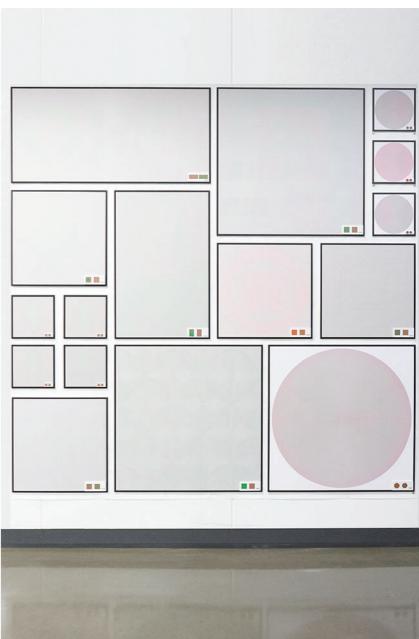


### 色覚によって見えてくる世界が変わる

一般色覚に見分けづらく、色覚特性（色弱）をもつ人に見分けられる色の組み合わせを自らで発見し、それをもとに一般色覚にも色を見分けられない状況を作り出す。

### Color Vision as a Means to Change the View of the World

In my work, I composed a set of colors that are hard to distinguish for people with "normal" color vision but are recognized by people with "different" vision, which is just another way of saying colorblind. Then I create circumstances in which a person with "normal" vision can no longer distinguish colors, which changes the viewer's perspective on the world.



※サイズ感等、実物と条件が異なるため、本来の見え方とは異なる。

### 「色弱=劣っている」を覆す

制作したグラフィックを直接見ることで、一般色覚を持つ人が、色覚特性（色弱）と同じように、ある色の違いを見落とす状況が作り出される。現代社会で色の見え方が劣っているとされている色覚特性には見えて、一般色覚には見えない。この状況から、そもそも色覚とは人それぞれ違って当たり前のことであり、劣っている、優れているという話ではないことを実感させることができる。



### 配慮から当たり前へ

今のカラーユニバーサルデザインは、いわば「健常者による、障害者に対する配慮のためのデザイン」である。この研究により、配慮から当たり前へ意識が変わっていくことで、本当の意味での多様性に近づけるのではないか？ 20人に1人が色覚が違って当たり前の世界。見え方に正しい正しくないという言葉は存在しない。そんな世界で、色とは情報を伝えるための共通言語として果たして万能なのだろうか？ そこから疑いをもち、今後少しでも多くの人がデザインをしていくことで、色覚特性の子供が夢を諦める必要がなくなっていくであろう。

